

第百七十九話 大勝利なるも戦略目的達成ならず、陸軍史上最大の作戦

帝国陸軍建軍来史上最大の作戦と言われるものが「大陸打通作戦」である。日本は、太平洋正面においては劣勢に追い込まれていたが、大陸正面では、日本陸軍は向かうところ敵なしの状況であった。この時期の大本営発表は大陸打通作戦に関するものが主であり、暗くなりがちな国民を鼓舞した。戦いは勝利の連続で、作戦目標を達するも、日本の退勢を挽回することは叶わなかった。



1 大陸打通作戦（一号作戦）の概要

太平洋正面の戦況に応じて支那派遣軍から部隊を抽出転用しつつあり、また南方資源地帯とのシーレーンも米軍の攻撃により被害を受けつつあった。

更には、大陸に設定された連合軍の航空基地からの日本本土爆撃も予期されつつあり、これらの状況を改善すべく一大作戦が計画された。本作戦は、1943(S18)年夏頃から検討されていたが、大兵力を要するので中々実施決定に至らなかった。台湾に対する空襲が行われるに及び建軍史上最大の陸上作戦が敢行された。

1944(S19)年4月17日～12月10日 作戦距離2400km（黄河～長江～仏印）

日本軍兵力：17個師団、1戦車師団（800台）、6個旅団の約50万人

中華民国軍 約100万人 日本側損害 11742名 戦病死多数十とも

2 作戦経過の概要

前半のコ号作戦/京漢作戦（河南の会戦/豫中会戦、洛陽攻略戦）と後半のト号作戦/湘桂作戦（第四次長沙会戦、衛陽の戦い、桂林・柳州の戦い、南部粵漢線打通作戦と湘桂反転作戦(光号作戦)）に分けられるが、日本軍は敵師団を壊滅に追い込み、或いは敵師団長を戦死させ、快調に進撃を続けた。中国軍は後退・撤退した。一部においては苦戦したものの、作戦は順調に進展し、12月10日には仏領インドシナに到達した。

航空戦は日本陸軍航空機の太平洋正面転用による減少と連合軍の増加により次第に攻守所を変えつつあった？

3 評価

- (1) 米陸軍航空基地群の占領は出来たが、内陸に航空基地を移動設定し、或いは、マリアナ陥落（1944(S19)年7月）もあり、日本本土空襲防止の狙いは果たせなかった。
- (2) 南方との陸上交通路の打通は為ったが、点と線のみであり、それを維持することは困難であった。

(3) 戦略目的の設定の適否及び本作戦の要否

支那事変の早期解決のためには蒋介石政権の覆滅が肝要(戦後史を知る者からは共産党軍の撃滅を最優先すべきだったのではとの思いも強い。)であり、まずそれを優先すべきではとの異論も出されたのであるが、首肯しうる。更には、太平洋南東方面の戦況切迫に際してこれほどの大作戦を実施する必要性が本当にあったのか？陸軍は、太平洋正面は海軍担当であり、吾知らずを決め込み、冷淡だった？

(4) 中国軍に対する評価

連合国の首脳や軍指導者は中国軍に対して非常に厳しい見方をしているが、当然だろう。蒋介石軍の士気の阻喪、腐敗は酷く、連合軍と共に戦う意欲も能力もないと断じている。日本陸軍が強すぎたという面もあったのだろうが、それにしても酷い言い方だ。事実、ヤルタ会談・ポツダム会談に、蒋介石は招かれなかった。

(5) 日本軍は「焼くな、殺すな、犯すな」の三悪追放を発し、軍律を遵守させた。

(6) 戦争には敗れたが、中国軍に降伏することを肯じずの陸軍将兵の痛切な想いは理解できる。

* 戦いに勝っても戦略目的達成に寄与せずんば、功なし！

(第百七十九話 了)